



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人 (敬愛)
- 2 進んで学び、深く考える人 (知性)
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人 (健康)
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人 (責任)
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人 (礼節)

合 唱

校長 白石 亨

熱戦はすでに3か月前から始まっていた。

いやいや戦いではないので、熱戦と言うと語弊があるが、合唱コンクールへの取組は夏休み前から始まっていた。一学期の終わりには各学年の課題曲、クラスの自由曲が決定し、ピアノ伴奏者には譜面が手渡された。習得と熟練には長い時間を要するピアノ伴奏。感じたものをピアノの音にのせる感性と技術。それを支えるためには長い時間をかけてピアノに向き合い練習していくことが必須である。耳を澄ませば、嬉しいときには嬉しい音を奏でるピアノ。悲しいときには悲しい音を奏でるピアノ。伴奏者の気持ちがそのままダイレクトに伝わっていくからこそ、ピアノ伴奏は難しい。長い期間をかけて孤独と対峙して、ピアノの鍵盤に立ち向かっていてくれた。どのクラスの伴奏者も合唱コンクールに向けて真摯に取り組み、素敵な音色を奏でてくれた。

そして合唱練習は、本番2週間前から本格的にスタートした。

最初の朝練習が開始された月曜日の朝、正門に立っていると、朝練習に遅れてきた男子生徒がいた。生徒は正門に入るなり、ハッと顔色を変え「あちゃ・今日から朝練習だった。失敗した。・これじゃ教室に入れないよ」とつぶやきながら、バツの悪い顔で校舎に入ってしまった。「教室に入れないよ」とのこの言葉。もちろん朝練習に遅れてくることは誉められたことではないが、クラスの皆に申し訳ない、面目ないとの素直な気持ちがよく伝わってきた。仲間意識を感じさせるこの言葉がとても嬉しく感じられた。

この日を境にして、合唱の歌声が清新二中全域に響き始めた。

練習風景を覗きにいくと、歌詞を大きく書き出した模造紙を黒板に貼り付け、本番さながらに練習しているクラスがある。模造紙には「強く歌うところ、優しく歌うところ」など手書きの赤い文字が添えられていた。教室と廊下に男女が分かれて、CDデッキから流れる曲に合わせて繰り返し練習しているクラスもある。その練習の形は違えども、どのクラスも熱心に練習に取り組んでいた。どの生徒も真剣な眼差しだった。

だが、初めからクラスがひとつにまとまり練習に取り組んでいたわけではない。

当初、なかなか本気にならない男子に対して、女子からは怒りの声が挙がっていた。勿論、多くの仲間がいれば、気が合う合わないもあって当然だし、合唱に対する意気込みや思いにも個々に温度差がある。私たち教員が知らないところで、知らない時間に、生徒同士には様々な摩擦があり、葛藤があったことと思う。でも、それらの課題を乗り越えてきたのも生徒自身なのだ。自分たちの力だけで乗り越えようと懸命に努めてくれた。

特に指揮者は全員の瞳を見つめ、気持ちをひとつにまとめようと熱心に指揮を振るい続けた。指先の繊細な動きにもその気持ちが込められていた。一步でも二歩でもクラスの歌声を前進させようとする真摯な気持ち。この気持ちが少しずつだが確実に仲間へ伝播していく。あるときを境にして生徒一人ひとりの気持ちの中に小さなさざ波が湧き上がる。さざ波はしだいに集まり、大きなうねりとなり、お互いがお互いの心を響き合わせていく。鳥肌が立つぐらい響き合っていく。クラス全員の歌声が共振して心がひとつになる瞬間が訪れてくる。

合唱コンクールをとおして、生徒諸君に最も大切だと感じてほしいことがある。

それはクラスを愛する気持ちだ。愛するとの表現はオーバーかも知れないが、これに代わるものはない。合唱の結果の善し悪しではなく、仲間を信じて互いに尊重する気持ち。この思いは担任の先生方も同様だと思う。

学校生活の中で、自分のクラスを純粋に愛せることほど、幸せであり、誇れるものはないと思っている。